

サビエル生誕五百年



ルルドの奇跡

チーズを乗せて焼いた食パンを出しながら妻は「巡礼で買ったチーズはこれで最後」と言う。早いもので、もう巡礼から二カ月が過ぎた。連載は最初の目的地ルルドなのに。

以前はご飯にみそ汁でなければならなかったのに、最近ではパンを喜んで食べる。考え方まで何となく洋風になり、南蛮巡礼記を書くのにふさわしい態勢になった。さて、人間の常識で

は考えられない「聖母マリアの出現」という出来事は、二千年前のイエスの時代でもなければ、キリスト教全盛の中世のことでもなく、わずかに百五十年前の十九世紀のことである。

ルルドの聖域は実に广大で、最初に建てられた大聖堂。そして、その手前のロザリオ大聖堂と聖堂だらけ。ロウソク行列がある大広場の中心には、冠の聖母像が建っている。今や年間五百万人が訪れる聖地ルルド。年間と言っても、巡礼のシーズンは四月から十月末まで。それも徹底して、シーズンオフはホテルも土産物店もほとんどが休みである。

私たちがルルドを訪れたのは三月末のシーズン直前、ホテルはほとんど閉まっていた。聖母マリアが少女ベルナデッタに出現したのは十八回。このうち

巡礼シーズンにあるロウソク行列 (奇跡の聖地ルルド)から



人だった。人が少ないのも独占した気分が悪くはないが、ロウソク行列がないのは「ルルド巡礼に非ず」と言わざるを得ない。

一人人近くの人がロウソクを手に「アベ・マリア」を歌いながら病者の回復を祈る。たくさんのボランテアたちと一緒にいった行列は「ルルド共同体の祈り」である。

それは病者の回復の祈りだけでなく、神への賛美と感謝の祈りでもある。だから病者は奇跡が起こらなくても心は癒され、新たに生きる力を得るのだから。

読者は奇跡なんてと思われられるかもしれないが、アレクシー・カレル著「ルルドへの旅・祈り」(春秋社)を読んでもらえば多少理解できるかもしれない。一九一二年にノーベル生理医学賞を受賞した科学者カレルは、受

賞十年前の一九〇二年、ルルド巡礼団の付き添い医師として、患者と一緒にルルドに来た。

彼が連れて来た患者の一人は、末期の結核性腹膜炎の若い女性であった。余りの重病、周囲の人は反対したが彼女の強い希望で参加した。しかし衰弱が激しく、水浴もできず、ルルドの水を腹部に数滴ふりかけるのがやっとであった。

ところが奇跡など信じない科学者カレルの目の前で彼女は治る。理論的にどうしても説

明できないこの出来事を彼は手記にまとめるが、科学者としてのプライドから公表しなかったのを、死後、妻が公表して本になった。回復した女性はベルナデッタと同じように修道女になり、生涯、神のために尽くしたという。

神の摂理としか言いようがないこのドラマに深い感動を覚えるとともに、人間だれもが聖なるものへの畏敬の念を失ってはならないと思う。(前山口放送取締役ラジオ局長)



明かりがついているのは私たちのホテルだけ